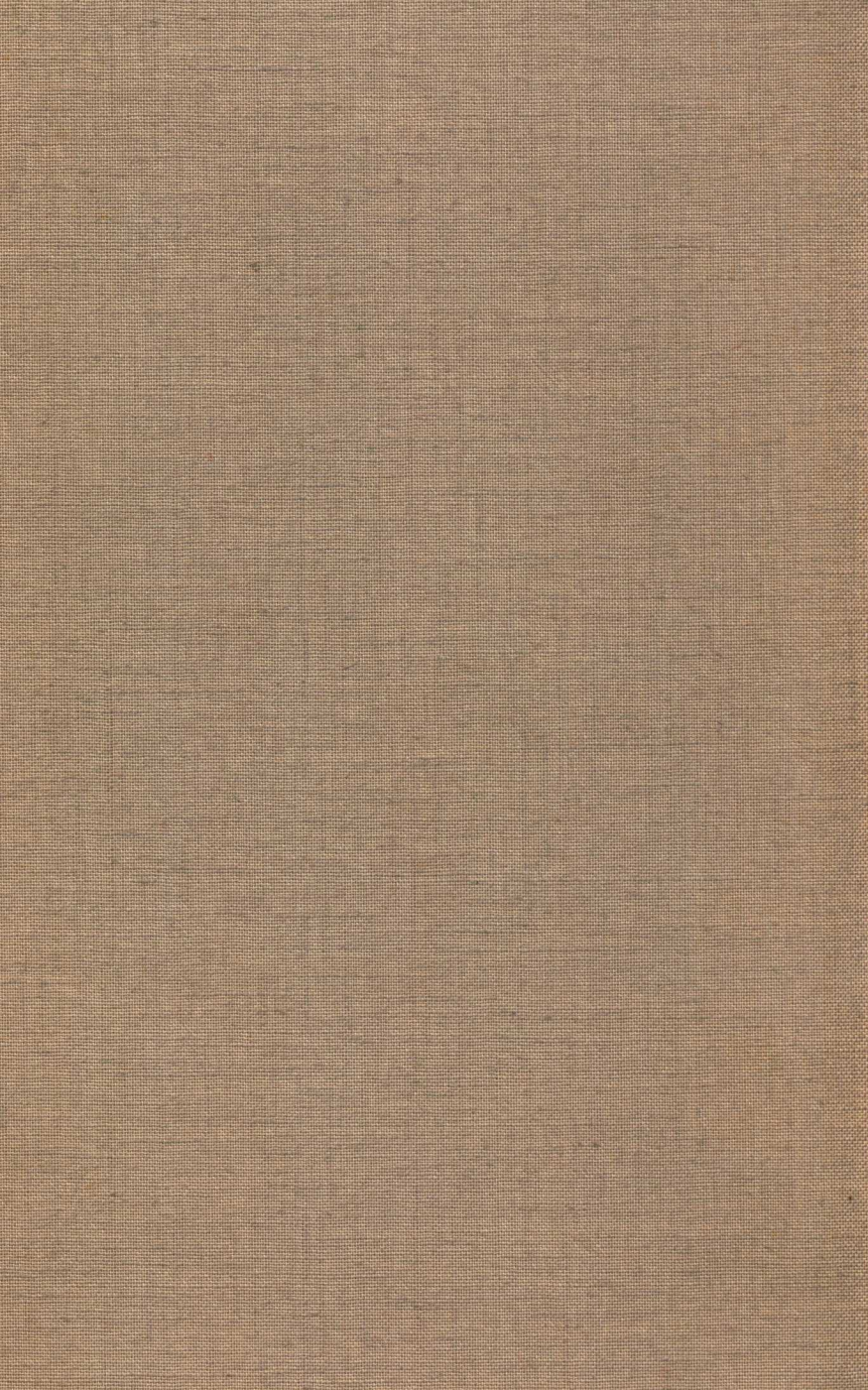




遠藤周作文学全集 1 新潮社版

青い小さな葡萄
曰い人



青^{あお}い小^こさな葡^ぶ萄^{どう}・白^{しろ}い人^{ひと}

遠藤周作文学全集第一巻

定価一五〇〇円

印刷 昭和五十年六月十五日
発行 昭和五十年六月二十日

著 者 遠藤周作（へんどうしゅうさく）

発行者 佐藤亮一

発行所 株式 新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部03（二六六）五一一
編集部03（二六六）五四一一
振替 東京四一八〇八

印刷所 三晃印刷株式会社
製本所 新宿加藤製本株式会社

© Shusaku Endo, 1975, Printed in Japan.

印丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信保宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

青い小さな葡萄	5
*	
アデンまで	133
学 生	161
白 い 人	175
コウリツジ館	241
黄色い人	261
ジュルダン病院	325

解題

351

遠藤周作文学全集

第一卷

小説 1

青い小さな葡萄

第一章

I

駅前の時計が十一時をうった時、アセチレン・ランプの下で生牡蠣なまがきをひきいでいた内儀が大きなあくびをした。

「御苦労だな。もう十一時じゃないか」

通りかかった巡査が黒マントの襟えりに首をうずめてたずねた。

「一杯やっていっておくれよ。今夜は客一人ないんだから」内儀は不機嫌に肩をすぼめ、牡蠣のなかにシトロンを入れ、「ああ、リヨンはいやだ。いやだ。復活祭までは霧ばかりでさ」

「気がめいるよ、全く。酒はいらないぜ。勤務中だから」

その夜はいつもより霧がひどかった。おまけに、細かい雨がともなっていた。ソーヌ河からたちのぼる霧は河岸の柵きざしやルノー工場の壁にぶつかり、広場の歩道をはいまわっていた。歩道は瘤こぶだらけの橡とちのきの並木が震え脱ぎすてた枯葉で泥んこに汚れている。うすい黄ばんだ霧の膜のなかに青い灯が泣いているようにうるんでいる。時々、広場のむこうから、ヘッド・ライトを反射させ

て、トラックがその膜をつきやぶる。けれども幌まくらをつけた車体がおりすぎると黄いろくにこつた霧の渦がまち構えていたようになだれこむのだった。

一人のやせた小さな男が寝しずまったゾラ町の方から千鳥足でやって来た。

ルノーの出張店の横に小さな飲屋がコサック亭と書いたネオンを明滅させていた。ペラッシュ車から夜ふけにおりてきた旅人を相手にする徹夜の居酒屋である。

男はしばらくたちどまり、それから一寸ちよつとよろよろしながら歩きだしたが、また気をとりなおしたと見えて、今度は威勢よく酒場の戸を押した。

「チェッ、外はひでえ霧だが、ここはすげえ煙草の煙だぜ」

踊場の上から朦々もうちやうたる紫煙のなかをのぞきこんで、

「今晚リョウは、デデ。どうせここだろうと思ったよ。おや、この店はいつから黄色人をやとったんだい」

やせた小さな男はあぶなげな足どりで階段をおり、バーテン台の前にすわりこみ、なにかをノートに書きこんでいた黄色人のボーイをじろじろとみつめた。

「なにを飲むんですか」黄色人のボーイは酔っぱらいから顔をそらせ、バーテン台の一点に眼をおとした。

「氣にくわねえな」酔っぱらいは台にうつぶせ、両腕の上に顎あごをのせながら、からみはじめた。「全く氣にくわねえな。お前にいじられたコップならきいくなるだろうよ。俺はきいらい指で

いじられたコップで酒は呑みたくねえんだ」

ボーイは顔をこわばらせ、両腕をたれたまま、じっとしていた。それから諦あきらめたように水道の蛇口をひねり、よごれた皿やコップを洗いだした。

「おや、おめえ、俺になにも出さない気か」

「しずかにしろよ」

さきほどデデとよばれた男が横あいから声をかけた。この男は酔っぱらいに比べると、どことなく、どっしりとした落着きがあつて工場の組長という感じがする。「労働者週報」を右手にもつて彼はゆっくりと杯をなめていた。

「怒らないでくれな」すまなそうにボーイにむかつて「酔わなきゃ誰だつていい男なんだ。心に溜たまっていることを酔えば吐きたくなるもんだね。あんたは学生かね」

救われたように黄色人のボーイは溜息をついた。「かせがなくちゃなりません」

「そうだろ」デデは毛のはえた太い指先を一寸、舐なめながら「この前飲みにきた時、あんたはまだ働いていなかったからな。ここで雇われているのは、あんたと、あの女中だけなんだな」

「そういうわけです。もっとも、私の方は一週間のうち、三度しか、ここに来ませんが」

「あの女中、エバとか言ったな。ポーランドの娘だそうじゃないか。どうしてこの亭主はあんな、斜視すがめの、肺病やみみたいな娘を使うのかね。体でも悪いんじゃないのか。始終、咳せきばかりしているぜ」

二人の話をうち消すため、酔っぱらいは手を伸ばしてラジオのスイッチをひねった。ルクセンブルグの深夜放送から甘ったるい女の唄声がながれてきた。

あなたに話してきかせよう

ある日 ある時 アルロンの町で……

「氣にくわねえな。全く氣にくわねえな」彼はダイヤルを変えた。「どいつも、こいつも甘い恋唄ときてやがらあ」

今度は太いしつかりとした男のバスがきこえた。今日、最後の政治解説である。

「スランスキイ、クルマンティス、スラングなどチェコ共産党旧首脳部は裏切りとスパイ行為とにより、本日、プラーグにて裁判されました。英仏の新聞記者は裁判に出席することを禁じられました。が、確実なすじによりますと、被告は一樣に党から押しつけられた罪状を認めたそうであります。これはハンガリーのミンゼンチイ裁判でもそうでしたが、やはり、われわれには共産国裁判の謎として考えられるのであります。のみならず彼等被告には常にスパイ行為とかプロレタリアへの裏切りという抽象的罪状のみが与えられ、われわれの裁判のように具体的事実をしめすことがあります。こうした曖昧な罪状を被告が理由なしに肯定したとは考えられないのであります。もし拷問や強制が彼等に……」

「チェッ、氣にくわねえな」酔っぱらいはラジオをとめて叫んだ。「全く、全く氣にくわねえ退屈な街よ。雨ばかり降りやがってさ。毎日、毎日、おなじ唄、おなじ出来ごとばかりじゃないか。おーい、ここには女の子はいねえのか」

エバはエプロンの下に手を入れ、やせこけた体を壁にもたれさせている。デデが言ったことは本当だった。皮膚の色が鉛色に濁ったこの娘は時々、拳を口にあてて、力のない空咳をした。そして玉つきをしている街の若者たちが吐く煙草の煙をものうげな手つきで追い払った。

土曜日の夜なので、町の青年たちは一帳羅の上衣をきこみ、頭をテカテカに光らせてキーを動かしてはいたが、ゲームにはすっかり飽きたらしく、白けた脂気のない表情をしている。雨をおかしてまでレピュブリック街に映画を観にいく勇氣もない。

「眠いなあ」彼等の一人があくびをしながら「外は霧だし、さ。いやだねえ。半どんの日だというのに、親爺ベイトジの奴、四時まで働かせるんだからなあ」

酒場のドアを押しあけ一組の老人夫婦が不安そうな顔をのぞかせた。老人はふるぼけて羊羹色ようかんいろになったオーバーを着こみ、これも四隅がもうすっかり擦り切れて色のあせた大きなトランクをひきずっている。老婆は小間物袋と男用の雨傘を手にもっていた。

「戸をしめて下さいな」エバは咳きこみながら彼等に近づいていった。

「わしらはボルドオ行きの汽車がくるまでここに待たしてもらいたいのだが、お嬢さん」老人はおそるおそる答えた。「だが、もしなにか飲まにや、いかにしたら」

「出ましようよ。お父さん」老婆は夫の袖を引っぱった。

彼等がふたたび戸を押して外に去っていくと、ペラッシュ駅の方から外の霧を通して拡声器のもの悲しい、かすかな声がきこえてきた。

——十一時半着、アヴィニオン—マルセイユ行き急行は間もなく参ります。十一時半着、アヴィニオン—マルセイユ行き急行は——

十一時半かつきりにアヴィニオン—マルセイユ行き急行は霧雨に煙るリヨン駅に停車した。機関車が喘うづぎながら吐きだす水蒸気が雨でひかった線路の上を白くながれていく。カンテラをもった駅員が鉄棒で、まだ湯気のたっている車輛しやりやうをひとつ、ひとつ叩いて通りすぎていった。トランクをさげた五、六人の男女がさむざむとしたプラットホームから思い思いの方向にちらばっていた。駅前に残っていた三台のふるぼけたタクシーが客をあきらめて闇のなかに消えてしまうと、広場はふたたび老人のように黙りこんだ。雨あしは先ほどより、すこしは衰えたが、霧は相変ら

ず、うすい黄色い膜であたりをつつんでいた。

牡蠣屋の内儀は籠の中の生牡蠣に油紙をかぶせていたが、その時駅の西口から出てきた一人の男が広場の真中にたちどまり、靴を石畳の上において、あたりを見まわしているのに気がついた。（今の汽車で着いたんだね）と内儀は考えた。（さしずめ駅か、コサック亭で夜をあかさねばならない手合いだろう）

男は左手で靴をもちあげ、ゆつくりとこちらに歩いてきた。彼のオーバーが片腕だけ奇妙な形をしているのに内儀は気がついた。

「ルーフ・ドルフ街はあちら側でありましたか」

軍人のように踵をあわせ、彼はゴツゴツとした仏蘭西語で言った。

「ルーフ・ドルフ？」内儀は相手の顔をじっと見つめ、それから横をむいて唾を吐いた。「知らないね。行っとくれよ」

靴音が堅い音をたてて去っていった。ふたたびパトロールから戻ってきた先ほどの警官に牡蠣屋の内儀は腕をふりまわしながら説明した。

「そいつはルーフ・ドルフ街と言ったんだよ。あんた覚えてるかね。今のフランクラン・ルーズベール街のことなんだよ。たしかに独逸人さ。むかしここに居たナチの一味だよ。でなきゃあ、あいつ等が、あの頃、勝手につけた町の名なんか、知っている筈はないんだから」

雨にぬれた顔をハンカチで拭い、彼は霧の臭いを大きく吸いこんだ。

霧は塵埃と汚物との浮いたソーヌ河のドス黒い臭気をふくんでいる。広場のむこうにリヨンの街が闇のなかに眠っている。それは大きな、疲れた獣のようにボン・ド・ショルイの沼沢地帯ま

で拡がっている。

無数の人間が、男女が、この夜、湿ったベッドの上に孤りぼっちで、あるいはたがいに絡みあいながら呻いている。冬のリヨンの夜空には一屑の星もない。彼等の呻きもうつろな顔もやがこの霧のなかに閉じこめられてしまう。

「あの店で金を使うことはないよ」と老婆は老人に言った。

「わしもそう思ったんだが……。なにしろ赤葡萄酒の小さなキャノンが四十フランもするんだし」

けれども老人はやっぱり少しは呑んだ方が良かったと考えていた。呑んでいればボルドオに行くまでこの棒のような脚が痛まずにすんだだろう。

「あの店で金を使うことはないよ。それに女中が咳ばかりしてたじゃないか。煙草の煙のなかで働いているからさ。テレーズとおなじように肺病だよ。あれは」

「でもすこし呑んでいけばよかったな」老人は鼻をすすり一昨日あった弟の葬式のことを考えた。これで最後の兄弟までなくなってしまった。今度は俺の番にちがいない。

広場のむこう側から固い靴音がコツコツと響いてきた。霧のなかを灰色の影が近よってくる。影は二人のちかくで、たちどまり、

「ルーフ・ドルフ街、こちらでありましたか」

それは独逸人の発音だった。老人は不安そうに老婆の顔に目をやった。

「ほっておきよ」老婆は肩をそびやかした。返事がないので、影は諦めたようにふたたび靴音をたてて霧の中に去っていった。

「今のボッシュ、右腕がなかったじゃないか、お前さん」

「あんた、印度支那から来たのかい」とデデは「労働者週報」をゆっくりポケットに入れながら言った。「俺はサイゴンに兵隊で行ったことがあるよ」

「そうですか」ボーイはいささか迷惑そうな顔つきで答えた。彼は下をむいたまま、なにかをノートに書きつけていたのである。

「サイゴンの俺の隊にも印度支那の連中は沢山いたよ。印度支那の文字はふしぎなものだな。あんたは学生だから仏蘭西語も書けるだろうな」

「もう、なにも、飲まないんですか」

デデの好奇心をそらすようにボーイは今まで書いていたノートを閉じて、棚から赤葡萄酒の瓶をとった。

「いや、ラムを一杯、ついでくれ。俺は何を話していたのかな。そうか。サイゴンの話か。サイゴンにいた時、日本人がはいってきたよ。あれはいけない。奴等はひどい連中だ。奴等がサイゴンに進駐してきた時……」

そこまで言いかけてデデは突然、口を噤んだ。顔をこわばらせてボーイが彼の顔をみつめている。

「……俺の言っていることは」デデは困ったように眼をそらした。「つまり、兵隊たちのことを。日本人の全部が全部……」

「氣にくわねえな」バーテン台の端から先ほどの酔っぱらいが口を入れた。「俺はきいろい奴はみな、氣にくわねえよ。デデ。お前、ミッシェルの弟のことを知っているだろ。まあ、聞きな。」